2009年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 漁獲	産地 生	産地 冷	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	消費支出 生(グラム)	消費支出 鰹節(g)	在庫	加工品 缶	加工品 削	加工品 節	加工品 生利
20	308	76.0	208.0	33.6	58.2	0.1	12.0	1,094	314	29.5	13.3	20.0	35.6	3.2
21	275	43.3	200.9	53.3	21.8	0.1	10.0	1,028	308	28.3	14.4	18.6	36.0	3.2
%	89	57	97	159	38	149	83	94	98	96	108	93	101	98

年	価格 産地 生	産地 冷	東京 生	輸入	輸出 生冷	消費支出 生(円)	消費支出 鰹節
20	303	201	547	155	174	1,727	987
21	353	140	613	106	100	1,578	989
%	117	70	112	68	57	91	100

漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にすると大別し一本釣りとまき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの２つの漁種により占められている。

中西部太平洋のカツオに関する漁業の特徴は、まき網漁業が中心で8 割以上、竿釣り漁業が約1 割、その他の漁業が1 割弱を漁獲する。まき網漁業については日本・韓国・台湾・米国の遠洋漁業国が5~6 割を占め、他はインドネシア、パプアニューギニア、フィリピンが多い。竿釣りについては、日本が5~7 割を占める。日本周辺の中心的漁場の常磐・三陸沖漁場（漁獲量10 万トン前後）でも1980 年代後半からまき網操業が増加し、年により漁獲量の半分近くを占めている。

戦後、日本の竿釣り漁業等の漁場拡大により総漁獲量は徐々に増大し、1960 年代後半には20 万トン、1970 年台後半には40 万トンに達した。その後、さらに熱帯水域のまき網漁業の規模拡大で急増し、1990 年代には100 万トン前後が漁獲され、1998 年からは120 万トン前後で推移し、2007 年には過去最高の170 万トン（暫定値）に達した。このうち北緯20 度以北の日本近海での漁獲量は1970 年代以降、15 ～20 万トンで安定している。

この海域における資源状況は、漁獲による死亡の割合は増加傾向にあるが、自然死亡に比べて低い値に留まっている。新規に資源に加わる加入量は大規模な海洋変動現象のEl Ni 撲（エル・ニーニョ）現象に続いて多くなる傾向にあり、1980 年代中期から高い水準が続いている。資源量の変動は加入量による部分が大きい。最近の資源量は長期的な平均値より高い水準にあると考えられる。現在の漁獲圧はMSY レベルより下で、過剰漁獲ではなく、資源量もMSY レベルより上で、乱獲状態ではないと考えられている。

本資源は1980年代中期から高い水準が続いているが、現在資源水準は高位でその動向は増加傾向にある、といわれている。

インド洋では最近5 年間の平均漁獲量のうち、38%がEU（スペイン・フランス）とセーシェルを中心としたまき網漁業、31%が流し網漁業（主にインドネシア、イラン、スリランカ）、26%がモルディブなどの竿釣り漁業、5%がその他の漁業という内訳になっている。2006 年までは全漁業の漁獲量が増加する傾向にあったが、そのうち特にまき網漁業の漁獲増大の比率が高く、FADs の利用拡大によるところが大きかった。最近では、まき網による漁獲のうち80%がFADsでの操業によるものである。また、西インド洋(FA051 海域)と東インド洋（FA057 海域）における最近５年間における平均漁獲量の割合は、76%：34%となっている。

インド洋における日本のカツオ漁獲は、その殆どがまき網漁業によるものである。1957 年以来、民間のまき網船1-2 隻が1980 年代半ばまで操業していた。1988 年以降、まき網船数が増加し最大

時には10 隻となり、1992 ～1993年の漁獲は3 万トンを超えた。また、1977 年からの海洋水産資源開発センター（現在：水産総合研究センター開発調査センター）の日本丸が試験操業を開始し、現在までほぼ毎年調査を実施している。1994 年以降民間のまき網船数は徐々に減少し、最近5 年間では日本丸の試験操業および1-2 隻のまき網船（民間船）が操業を行っているだけで、漁獲量は1,500 ～4,400 トンで推移している。

インド洋での漁獲量は1950 ～1983 年は最大7 万トン程度だったが、西インド洋でまき網漁業が本格化した1984 年には10 万トンを超え、1992 年には30 万トン、1999 年には40 万トン、2005 年には50 万トン、2006 年に60 万トンを超えた。2007-2008 年は、ソマリア沖海賊問題によりソマリア沖500 海里以内でEU のまき網漁船が操業を自粛したため、それぞれ45 万トン、41 万トンへと急減した。

インド洋の資源は、現在資源水準は高位でその動向は横ばい傾向にあるといわれているが、以前に比べると悪くなっている、といわれている。

また、国内供給問題では、近年大型竿釣船の休・廃業が多くなっており、燃油問題や資源問題も含めて、今後の経営不安要素も多い。

本年のカツオの漁獲量は、27.5トンであった。

産　地　水　揚　量　と　価　格

21年の産地水揚量は、24.4万トンで前年（28.4万トン）並みであった。

内訳は、生4.3万トン、冷20.1万トン（前年：生7.6万トン、冷20.8万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、釣りの初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）は悪かった一昨年、昨年をやや上回った（漁場が伊豆列島西側に形成された）が低水準ではあった。そして４月以降も漁況は低調に推移し、黒潮前線を越えてから本格化する三陸・常磐沖での漁も、本年は竿釣り、巻き網とも低調で水揚げは近年でも最も悪いシーズンとなった。

一方一昨年極めて好調に推移したまき網漁は昨年、そして本年は殊のほか低調に推移し、竿釣り同様目立った山場もなく、終漁も昨年同様早かった。

海域別漁獲量は、三陸48％（前年：65％）、常磐34％（前年：9％）、南西・東海3％（前年：14％）、九州西部5％（前年：3％）九州南部10％（前年：9％）であった。

本年も漁場形成の主体は三陸・常磐海域主体で、その他の海域での漁獲は低調であった。

南方竿釣りのカツオ（東沖を含む）焼津

年次	単位		20年	21年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	168	162	96
水揚量	トン	計	39,320	33,635	86
々	々	カツオ	32,472	21,396	66
々	々	ｷﾊﾀﾞ他	6,848	12,239	179
１隻当たり	々	計	234	208	89
水揚金額	100	計	10,853	8,133	75
１隻当たり	万円	計	65	50	78
価格	円/kg	平均	276	242	88
々	々	カツオ	247	218	88
々	々	ｷﾊﾀﾞ他	415	283	68

海外まき網の状況（焼津）

年次	単位		20年	21年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	158	169	107
水揚量	トン		117,336	125,947	107
１隻当たり	々		743	745	100
水揚金額	100		23,482	17,815	76
１隻当たり	万円		149	105	71
価格	円/kg		200	141	71
水揚量	トン		87,566	99,647	114
１隻当たり	々	カツオ	554	590	106
価格	円/kg		184	124	67
水揚量	トン		26,056	24,081	92
１隻当たり	々	キハダ	165	142	86
価格	円/kg		264	213	81
水揚量	トン	メバチ	3,595	2,190	61
々	々	その他	119	29	24

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方が前年(2万1千トン)を引続き下回る1万6千トン、東沖が前

年（1.1万トン）をかなり下回る0.6万トンで南方、東沖とも不振が目立った。一方、本年の海巻きは、カツオが前年を上回り、キハダ（キメジ）、メバチ（ダルマ）は何れも前年を下回った。

竿釣りビン長は従来から「トロビン長」として回転すし等を始めとした外食産業・居酒屋等での需要増加もあってマーケットは定着している。本年は、秋口から冬場にかけての東沖（天皇海山）での漁は本年も皆無であったが、より陸地よりでの操業で若干漁獲があった。上半期の伊豆列島周辺漁場での漁獲は低調であった前年に比べると再度大幅に増加した。なお本年の釣トンボの水揚げは生鮮20,492トン(前年13,310トン)、冷凍11,929トン(前年6,267トン)であった。

なお。まき網によるビンナガの漁獲は生1,388トン（前年938トン）、冷763トン（前年95トン）であった。

価格は、生353円（前年303円）、冷140円（前年201円）と生は水揚げ減少による高値推移、冷凍はバンコック相場も下落もあり、軟調推移となった。

消　費　地　入　荷　量　と　価　格

21年の東京消費地の入荷量は、生1万トンで前年（生1.2万トン）を下回った。

本年は４，５月型でその後は低調な入荷で、近年増加している夏から秋口にかけての入荷の増加がみられなかった。

近年カツオはＢ１製品の定着の中で市場外流通主体に「タタキ」や東沖「トロカツオ」等は周年商材として出回っている。特に、本年は漁況の不振や秋口のサイズ組成の悪さもあって上述のような出回りが多かったものとみられる。

本年は出回りも少なくなっており、末端での消費も数量、金額とも昨年を下回った。

価格は、613円で入荷量の減少を反映し、前年の547円を上回った。

在　庫　量

なお在庫量は、2.8万トンで輸入が増加し、輸出が減少したものの国内生産の減少が前年(3万トン)を下回った。

輸　出　入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、年々少なくなって僅かになっている。

本年は、原魚2.2万トン（前年5.8万トン）、缶詰140トン（前年94トン）であったが、原魚輸出は缶詰用として基調になっているが、本年は国内漁がやや低調だったこともあり、前年を大幅に下回った。

輸入は平成年度に入ってから円高傾向もあって年々増加傾向がみられていた。これは節用需要の高まりで量、価格、品質とも安定している輸入物への依存度が高まっているためである。本年は国内漁の低迷もあって、輸入物依存度も高かったとみられ5.3万トンで前年（3.3万トン）を大幅に上回った。

したがって輸入価格は、106円で前年(155円)を引続き下回った。